



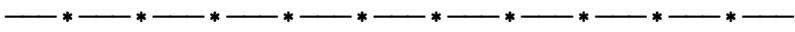
Data

監督: アスガー・レス
 出演: サム・ワーシントン/エリザベス・バンクス/ジェイミー・ベル/ジェネシス・ロドリゲス/アンソニー・マッキー/タイタス・ウェリヴァー/エド・ハリス/エド・ペーンズ/キーラ・セジウィック

👁️👁️ みどころ

地上60mのビルの幅35cmの縁の上に立った男は一体ナニ者？単なる自殺願望者？それとも？高所恐怖症の私には目がくらむが、群衆やマスコミが注視する中、男は「交渉人」との「交渉」を続けながら二元中継(?)で「ある計画」を着々と！

『ダブル・ジョパディー』(99年)は殺人罪だったが、こちらは窃盗罪？無実の罪だということを実証するにはなるほど、こんなやり方が……。アクションばかりに目を向けず、そんなポイントもしっかりと！



■□この邦題から何をイメージ？不可解な行動の目的は？■□

「崖っぷち」という日本語は、第1に「崖のふち」という意味だが、第2に「限界ぎりぎりにある状況・状態」という意味もある。第1の場合の「崖っぷち」は普通山などをイメージしており、高層ビルの崖っぷちはあまり念頭にないが、原題の『MAN ON A LEDGE』は誰かがビルから飛び降りようとしている時、実際に使われる警察用語で、「LEEDGE」は(壁・窓から突き出た)棚を指す言葉だ。

本作の主人公ニック・キャシディ(サム・ワーシントン)はもともと警察官だったが、今は移送中の30億円のダイヤモンドを横領、転売した罪で、既に2年間も刑務所に服役している男だから、第2の意味の「限界ぎりぎりにある状況・状態」も過ぎて実質的に人生の敗残者。ところがそんな彼は、元相棒の刑事マイク・アッカーマン(アンソニー・マッキー)の尽力によって父親の葬儀への参列を特別に許可された際、見張り警察官の間について脱走。そして今、彼はマディソン街の名門ルーズベルト・ホテル21階の部屋でルームサービスの豪華な朝食を食べた後、部屋中の指紋をふき取り、「潔白な身で逝く」とい

う書き置きを残し、何とホテルの窓を開けて地上60メートル、幅わずか35センチの壁面の「崖っぷち」に立っていた。地上から「スパイダーマン」ならぬニックの姿を発見した人たちは、この「自殺願望者」の登場に驚いたが、その直後に道路は「その瞬間」を期待する野次馬たちとテレビ局のクルーたちでいっぱいになり、さて、ニックは一体何のためにこんな行動を？ ホントに自殺するのなら、いつまでも人騒がせなパフォーマンスを続けず、さっさとやってほしいものだが・・・。

■□■自殺願望者は、なぜこの女性交渉人を指名？■□■

『交渉人 真下正義』（05年）（『シネマルーム7』369頁参照）や米倉涼子主演のテレビドラマ『交渉人～THE NEGOTIATOR～』等で、日本でも「交渉人」なる仕事が認知されてきたが、Wikipediaによると、交渉人とは「人質救出作戦において犯人との交渉に関する訓練教育を受け、専門的知識・技能を有している警察官」のことだ。

本作に登場する男性の交渉人ジャック・ドハーティ（エド・バーズ）も女性の交渉人リディア・マーサー（エリザベス・バンクス）もニューヨーク市警に属しているらしいが、ニックとの交渉に臨んだジャックは、ニックからリディアを逆指名されることになったから、ちょっとお気の毒。なるほど、交渉人は上司からの指名ではなく、交渉相手（＝自殺願望者）からの逆指名によって決まることもあるわけだ。しかし、リディアは最近若い警察官の自殺を止められなかった失敗を犯したばかりで、その傷を引きずっていたから、この逆指名はかなり唐突。ニックはそんな最近の事情を知って、リディアを逆指名したの？

■□■この交渉はヤバイ！これでは自殺願望者のペースに？■□■

飛び降りそうでなかなか飛び降りないこの自殺願望者が、リディアとの会話を何かの引き延ばしのために利用しようとしていることはリディアももうすうすう感づいたが、この男の身元も自殺の動機もわからない状態では、いくら有能な交渉人でも適切な対応はムリ。しかし、うまいことカマをかけて吸わせたタバコの指紋などから、この男が元警察官でダイヤモンドの横領、転売の犯人として服役中だったことがわかると、リディアはこの行動の目的を少しずつ理解？しかし、それをちゃんと理解するためには、もっと時間が！

他方、本作は地上の群衆とマスコミが注目するニックの一举手一投足と同時平行で、ニックの弟のジョーイ・キャンディ（ジェイミー・ベル）とジョーイの恋人アンジー（ジェネシス・ロドリゲス）の行動を追っていく。2人がこのホテルの向かいにそびえ建つニューヨーク屈指の実業家でダイヤモンド王として知られるデイヴィッド・イングラダー（エド・ハリス）が所有するビルに、七つ道具（？）を持って忍び込んでいるのはなぜ？ここで一体ナニを？ニックは隠し持った小さなイヤホンとマイクで、この2人と密に連絡を取り合っているが、それがわかるのは私たち観客だけで、地上から見上げている群衆はもちろんすぐ近くにいるリディアですらそんな行動はわかっていない。そんな中、さかんに無実の罪であることを訴えるニックの姿にリディアは少しずつ同調し信用し始めたが、それってかなりヤバイのでは？これでは、「交渉」は自殺願望者のペースに？

■□■サムも高所恐怖症らしいが・・・■□■

私は極度の高所恐怖症だから、10階建てのビルの屋上から下を見下ろすだけでもかなり怖い。そう思いながら本作のプレスシートを読んでいると、何と『アバター』（09年）（『シネマルーム24』10頁参照）で大フィーバーし、『タイタンの戦い』（10年）（『シネマルーム25』13頁参照）でも主演を務めたサム・ワーシントンも高所恐怖症らしい。もっとも、近時の映像技術をもってすれば実際に地上60メートル、幅35センチのビルの縁に立たなくても、それらしく映すことなどきわめて簡単。当然そう思うし、現にアクションを伴う多くのシーンは地上2.4メートルという高さのセットの淵に立って撮影されたらしいが、縁に立つシーンの大部分は高さ60メートルのホンモノのルーズベルト・ホテル壁面の縁で撮影されたらしい。あの高さで窓枠を越え、外に出られるのか？実際にあの縁に立てるのか？彼は話せるのか？動けるのか？演技できるのか？等々の製作サイドの心配を、サム・ワーシントンは見事にクリアしたわけだ。

『リミット』（09年）を筆頭として、密室だけで撮影される映画は多く、本作でもニックが地上60メートルのビルの縁に立っているシーンが大部分を占めているが、さてそこに見る彼の恐怖の表情は？そのリアルさが本作の見どころだが、後半からクライマックスにかけて見るニックの暴走（？）は意外！ここまでやってしまうとそれまで維持され続けてきたリアルさは失われ、「こりゃつくりもの！」と感じてしまうが、ストーリーを面白くするためには、それはそれで仕方なし・・・？

■□■警察の腐敗は、日本でもアメリカでも・・・■□■

最近の日本では、「大阪地検特捜部主任検事証拠改ざん事件」によって超エリートだった「特捜検事」の権威も地に落ちたうえ、国民から最も信頼されるべき警察官の不祥事も多い。2012年3月には、大阪府警福島署の男性警部が事件の証拠品として保管していたたばこの吸い殻が紛失していることを知り、別の吸い殻を用意して証拠品をねつ造していた事件が発覚したが、こりゃ「もつての外」としか言いようがない。しかし、警察の腐敗は日本に限ったことではなく、ニューヨーク市警でも同じらしい。実は、それが本作の大テーマ！人間は誰でもお金や権力に弱いから、警察官だってイングラダンの財力と権力の前には・・・？

突然ルーズベルト・ホテルに出現した自殺願望者への対応の現場指揮を執るのはニューヨーク市警のダンテ・マーカス（タイタス・ウェリヴァー）だが、自殺願望者がニックだとわかった時のマーカスの反応は？また、父親の葬儀への立ち合いを世話したため事実上ニックの脱走を手助けしたことになる元相棒のマイクの反応は？さらに、ジョーイとアンジーの2人が忍び込んでいるこのビルで今日新しいイベントの発表をすることになっていたダイヤモンド王のイングラダンの反応は？刑務所に入っているはずのニックは今、そこで何をしようとしているの？イングラダがそう考えたのは当然だが、さてそれを理解できるのは、いつ？しかして、リディアの交渉が容易に埒が明かない中、遂にマーカスはニックを取り巻く特殊部隊に強制突入を指示したが、その時に女性交渉人リディアがと

ったあつと驚く行動とは？

■□■あつと驚くこの急転換から、何が見える？■□■

ニックが何をしようとしているのかはわからないが、とにかく何かを訴えるために決死の行動をとっていることだけは確実！それを知るためには、とりあえず強制突入を阻止するのが先。そう考えたリディアがとったあつと驚く行動は、ご想像どおりリディアも窓の外に出てニックと並ぶこと。こうなると「人命尊重」という大義名分の前に警察も突入を強行することができなくなったが、リディアがニックの近くに並ぶとニックが小型のイヤホンとマイクで誰かと連絡を取り合っていることがわかったからビックリ！ニックは一体誰と連絡を取り合っているの？ニックの狙いは一体ナニ？また、私は欺されたの？リディアがそう考えたのは当然だ。警察官の自殺を止められなかった前回の失敗と同じように、リディアは今回もヘマをしでかすことになるの？

目の前の出来事しか見えないリディアはもちろん、スクリーン上の「二元中継」を観ている観客ですら、ニックの狙いは容易に把握できないが、さてあなたはこの急転換から何が見える？

■□■なるほど！そういうことだったのか！■□■

『アバター』で大アクションを見せたサム・ワーシントンも地上60メートル、幅35センチの「縁」の上だけでは大した演技はできないから、本作前半は「密室劇」のような腹の探り合い合戦が続く。それが急展開するのはリディアがニックと並んでからだ、**「旧悪」**がバレそうになるイングランダーの動きが急になるにつれて、マーカスは遂に強制突入を指示！するとそれ以降は、ビビリながら縁の上に立っただけと思っていたニックが別人のような行動を見せてくるから、クライマックスに向けたそのアクションに注目！もっとも、いくら何でも地上60メートルの縁の上を駆け回ったり、地上までダイビングしたりという本作に見るアクションはあまり現実味がないから、あくまでつくりものの映画として・・・。

それはともかく、本作のポイントは群衆やマスコミを前にしたこのパフォーマンスによってニックが何を目指していたのかということだ。近時日本では「足利事件」の再審判決によって無期懲役とされていた菅家利和氏の無罪が確定した（2010年3月）が、無実の罪だと訴えることはきわめて難しい。『ダブル・ジョパディー』（99年）では、夫殺しの罪で1度殺人罪とされてしまえば、もう1度夫を殺しても「同じ罪で2度と罪にされることはない」という「二重処罰の禁止」条項を使ってヒロインが今なお生きている夫殺しに臨んだ（『シネマルーム1』38頁参照）。そう考えると、時価30億円のダイヤの横領・転売で服役しているニックが無実の罪であることを証明するためには、イングランダーが今なおそのダイヤを持っており盗まれてなどいないことを証明すれば、それでOK？なるほど！そういうことだったのか！そんなクライマックスに向けた展開は少し単純だが、それなりの工夫と面白味があるからそれに注目！

2012（平成24）年5月21日記